

平成31年3月6日、政策秘書課職員との話です。



うちの夫、何とかしてくださいよ

行事に参加した際などに、「市長さん、うちの夫、何とかしてくださいよ。朝ご飯を食べたと思ったら『おい、昼は何を食べる?』と言う。ずっと家に居られたら、こっちの調子が悪くなっちゃう」と言われることが度々あります。

今、マスコミでも盛んに「夫源病」や「亭主在宅症候群」と報じられています。退職前は、家庭のことは妻に任せ、言ってみれば職場に引きこもっていた夫が、今度は家に引きこもって、職場の価値観で上から指示してくることに女性のみなさんは耐えられないとおっしゃいます。もし夫が、病気になって在宅での療養や介護が必要になっても、相変わらず、上から指示をされたら、介護をする自信がないと話される方や、「いっそ離婚して、『もう知らない』と言いたい」とまでおっしゃる方もいらっしゃいます。

男性陣とこういう話をしても、「自分の家は大丈夫」と思っている人が多いようです。40代、50代と話すと、「うちの両親も、心配です」とは言うけれど、自分自身がそうなる可能性があるとは、まったく想像もしていません。このままでは、男性は家から出ずに不健康になり、女性は亭主在宅症候群で調子が悪くなる一方です。

70代半ばを迎える頃には、男女ともに自立度が落ちていくと言われていています。年間270万人生まれた団塊の世代が、75歳になる2025年問題は、もう目の前です。もし、介護が必要な状態になった人が、家族から「もう知らない」と見放された場合、どうなるのでしょうか? 「そのために介護保険制度がある」と思われるかもしれませんが、国では2025年には、全国で約38万人の介護人材が足りなくなると予測しています。制度を使ってプロに任せたくても、そのプロが足りません。家族も支えきれません。

とにかく家に閉じこもらず、外に出かけ、人とつながり、元気でいていただきたいのです。これまで日本の成長を支えてこられた世代のみなさんが、いくつになっても、「必要とされている」と感じ、地域でやりがい、生きがいを持つことができる「役割と居場所があるまち」にしていくことが必要です。毎月の広報ながくてには、さまざまな講座の募集案内が載っています。趣味でも、仕事でも、何でもいいと思います。自分のやれることから始めませんか。そして、既に、活動いただいている方には、役所のお客様にならず、主体的に事務局等を担っていただく仕組みが必要だと思っています。そうした仕組みの知恵もお貸しいただきませんか。

～市長の話を聞いて～

私は、開口一番、市長に「あー、うちの母も同じこと言っています」という感想を言いました。市長から、「親だけじゃなく、あなたの問題でもあるんだよ」と言われても、最初はピンときませんでした。私は独身なので、介護が必要になったとき、配偶者や親類は頼りません。まさに当事者なのに、自分が介護される側になったことを想像したことはありませんでした。「きっと何とかなる」と楽観的に考えたいけれど、考えれば考えるほど、「何ともならない」のかも…と思います。

介護のプロや周囲の人等、いろいろな人の力を借りるしかありません。そのときには、「ありがとう」と言えるようになりたいし、何よりも、年をとっても元気でいられるよう、仕事以外にも出かける場、役に立てる場を、今から見つけていきたいと思いました。